

【長寿寄稿】

卒寿紀行

鎌を肩にして歩くのが通常であった。時には上級生に鎌を持たされることもあり、両肩に鎌を担いで行動は140cm弱の小柄な私には非常に辛かった。たまに楽をしようと行く道と平行に走っていた営林所のトロッコ線路の車両を動かして乗った。その時には営林所署員に見つかり怒られたりした。



戦前の実習棟
佐藤貞悦氏(S13M/故人)の
卒業アルバムより

この頃、県南地方にも度々艦載機の来襲があり、特に7月15日がすこかった。この日私は学校が休みで家にいた。突然空襲警報が鳴り、遠くでダダダダという鉄砲音(機銃掃射の音)があり、それから間もなく爆音がして飛行機が当町の頭上近くを北西方面に飛び去った。さあそれから大変だった。それは大曲から約6km程離れた六郷町明天地野に飛行機建設のため小学生や一般の町民が多数勤労奉仕に行っていたからだった。私の家でも小学5年の妹と病弱な上の姉が奉仕に行っていた。直ぐに私か母のどちらか迎えに行こうかと相談したが、もし途中で行き違いになってはと思いつめた。夕方二人とも元気で無事に帰って来た時はホッとして喜んだ。妹や姉から現地での様子を聞いて、本当に大変な目にあつたんだと思った。この他にも数回、敵機の来襲があった。ある日朝学校に行こうと家を出た時突然空襲警報が鳴り、遠くで爆音と機銃の音がして慌てて家に戻った。その頃駅に行ったが汽車は不通、訊けば手前の駅で汽車が機銃掃射を受けて負傷者も沢山出た模様とのことだった。翌日いつもの通り汽車でいつも乗っている車両(乗る車両は大体学校ごとに決まっていた)に行ってみると、座席の背面や椅子が丁度蜂の巣のように弾の跡の穴が空いていた。もうちょっと遅い時間だったら、私達もこんな目にあっていたらうとぞっとした。また別の日だったが私達が利用する奥羽線の秋田に向かう最初のトンネルの手前で貨物列車が狙われ、トンネルに逃げ込むのが間に合わず爆撃された。高い線路から機関車や貨物車両が転がり落ちた。運転士は即死だったという。付近の田地には爆弾の跡が多く開いていて、後には水が溜まり丸い池になっていた。このような状態で夏休みに入ったが、1週間程の短いものだった。

8月14日、従兄から夕方重大発表があるので待っているよう連絡があった。しかし7時、8時、9時と待ったが何も知らせはなかった。その晩のことである。夜の12時近い頃、突然ドスンと音が鳴るの

と同時に空襲警報が鳴った。そして轟々とした爆音である。慌てて防空頭巾を被り自宅の内蔵に退避した。暫くしてここには爆弾が落ちて来ないと合点して外に出て空を仰いだら飛行機は雲の上を通っているのが影は見えなかった。どうも飛行機は秋田の方に向かっていようだ。この町は大丈夫らしいと、しばらくして西山方面を見ると山の上が赤く染まって見えた。大変だ、秋田が爆撃されている。と大騒ぎになった。まんじりともせず夜が明けた。第一に心配なことは秋田の姉のことだった。翌15日朝、姉が無事であるとの知らせがあり安堵した。そして昨夜からの爆撃は秋田土崎の油田地帯と船川港の製油所だったと伝えてきた。昨夕の重大発表とはこのことだったのかと早合点をした。そして昼の12時に重大発表があると町内から連絡があり、ラジオの前に近所の人々が集まった。ラジオがガアガと雑音で良く分からなかったが、どうやら陛下の終戦告示であるらしい。しーんと聞いていたが、皆は戦争が終わったなんて信じられずこれが本当なのか否か議論した。だんだんと現実だと判ると緊張も解けたが、これから我々はどうなるのかとまた心配だった。それから2日目頃、短い夏休みも終わり、登校は夏休み前と同じ開墾地へ行った。現地に集まった皆は作業が手に付かなかった。昼近くに海軍の飛行機が飛んできてピラを沢山撒いて行った。それには「終戦は一部の軍の仕業で、私達軍部はあくまで徹底抗戦する」というような内容であった。翌日からは開墾を中止して本校に戻り勉強することになった。

終戦になって一番変わった授業は英語復活、航空関係の課目が無くなった事である。そして私達のクラスは機械科B組となった。復員してきた先生達には航空関係の人が多く、授業の際、講義よりも飛行機の話に花を咲かせる事も度々あった。全国に散らばって動員されていた5年生(今の高校2年生)も帰って来た。近くに動員されていた4年生も帰って来た。そしてそれからまた下級生への苛めが始まった。朝礼では無部のものは立たされ気合をかけられたり、殴られたり、歌を唄わされたりした。私はスキー部に入ったが、これはリンチから逃げれるし、夏場には部の練習もないだろうと考えたからであった。週に何日か部活の日は終業後、私の一番苦手なマラソンがあった。

終戦から5日目は私の14歳の誕生日。8月末に兄貴が予科練から帰還してきた。そして9月7日、昨年秋から寝込んでいた父が兄貴に今後のことを話すかのごとく死亡した。工業学校入学、秋田爆撃、終戦、誕生日、兄貴の帰還、父の死亡と私にとっての記憶すべき昭和20年だった。秋には秋田でも進駐軍の往来が目立つようになってきた。翌21年(1946年)2月末頃から今までのお金が封鎖され、一人百円まで新円の切り替えになった。我が家の僅かな預金はどう

株式会社

渡辺佐文建築設計事務所

取締役会長 渡辺 佐文 (A25卒)

〒010-0954 秋田市山王沼田町6番8号 TEL 018-863-8431



【長寿寄稿】

卒寿紀行

にもならなかった。そして10月には第二次農地改革があり、小さな地主だった我が家には保有米が入らなくなり一般の家庭と同じ配給米だけとなった。御飯には芋・大根菜が入るのは良い方で、アメリカ軍放出のトウモロコシ粉はパンにしても食べられたものではなかった。我が家でも衣類などは次々と食料に替えられた。いずれにしても食糧難時代だった。

学校に行く途中のコースで手形方面を通る場合、山間の林の中でよく休憩したが上級生から度々弁当を開けさせられ、ニンヤホッケなどの魚は除外され玉子焼きなどは調達された。朝が早くて朝食の弁当と二個持ってきているものや、部活などで遅くなるので夕食用の弁当を持ってきたものもいたが、一個は容赦なく取り上げられた。本当に食料事情が悪く、各線毎に農業への手伝い・芋掘り・除草・稲刈りなどに行つた。時には農作業休日もあったので、工業学校ではなく農業学校だと苦笑いしたこともあった。

汽車は一日に数本、満員で客車に乗れなくて機関車の前や石炭車の上に乗ったりした。また貨物列車にこっそり乗り込んだり、時には無蓋車両に乗って顔を真っ黒にしたこともあった。

このころ汽車の燃料は亜炭で質が悪く、火のついたまま列車後方まで飛んで来た。そして窓とその隙間に落ちて来て燃えだしたり、また車両連結部の幌が燃え出すこともあった。

或る日の帰途丁度、玉川鉄橋に差し掛かる時、前の車両との連結幌と窓隙間に燃え出した。さあ大変、列車を止めてもらったら下は玉川、飛び降りることは無理、ようやく橋を渡った直後に列車が急停車した時は本当にほっとした。

昭和22年(1947年)2月末、我々を苛めた上級生が卒業するとき、仕返すかとの話が持ち上がった。が、向こうから謝ってきたと言うので、相談の末これは中止することになった。

(3)秋田工業高等学校

昭和23年(1948年)4月、同機械科B組1年生となった。前年のクラスから10数人が辞めたり転校したり転科したのもいて、人数は殆んど変わらない50人位だった。

この5月からサマータイムが実施された。私はラジオ製作に興味を持ち、ラジオ店で修理のアルバイトをしたりした。また音楽に興味を持ち、特にクラシック音楽を聴くのに夢中になった。

学校では理化学班に入り藤井(光)先生の指導を受け、自由研究やカメラ撮影等に精を出した。翌昭和24年の2年の時、担任の石郷岡先生が病気で入院され、機械科長の若林(年)先生が担任となった。

昭和25年3年生になり、同級生には大学受験の勉強をしている

人が多かったが、私は呑気で音楽・映画や読書に明け暮れていた。夏休みには友達と3泊4日の旅行に出かけたりしていた。

9月に学校で修学旅行があった。その頃、県では男子高校は1泊旅行しか許可していなかったで、これに従い我々のクラスは東京1泊、車中2泊の日光・東京見物ということになった。夜行列車で朝宇都宮着して日光見物をし、そして東京浅草の宿に着いたのは夕闇迫るころであった。翌日は午前中東京見物、午後は佃の石川島重工業(株)第1工場の見学であった。

11月になって、就職が進学かで先生との話し合いがもたれた(この頃、朝鮮戦争の最中なのに就職難であった)。私は東京の私立大学入学は経済的に無理なので、地元国立大学を選ぶか東京へ就職するしかないと考え、大学受験の準備をしながら就職活動をする事にした。

結果的に憧れの東京で、幸いにも石川島重工(株)に就職することが出来た。翌昭和26年2月末秋工高卒業、3月下旬上京、横浜市鶴見区の親類に寄宿して東京まで通勤、佃の石川島重工(株)本社に入社した。1週間の教育を受けて4月に配属されたのは、深川豊洲にある第二工場(主に造船及び関係機械の製作)の機械設計であった。



ラグビー記念品



総合建設業

伊藤工業株式会社

代表取締役社長 **伊藤 満** (昭和54年土木科卒)

本社 〒010-1221 秋田市雄和平沢字舟津田78-1
TEL. 018-886-2135 FAX. 018-886-2749
E-mail. info@ito-kogyo.jp
URL. http://www.ito-kogyo.jp/

ISO9001:2000
PERRY JOHNSON REGISTRARS, INC. C2002-01584
JAB QS Accreditation R634
本社認証取得